

「第二次大戦とは何だったのか？」

福田 和也著

バグダッドが陥落した日、米国では、かつて制圧された歴史をもつ日本から来た若者が大リーグで満塁打を放つ。その二枚の写真は新聞の一面を飾り印象的だ。戦後五十年は我々に様々な情景を映し出すが、第二次大戦とはそもそも何だったのか。世界的に与えた影響からすると第一次大戦に及ばぬ、という疑問が常に著者にはあった。そして、メディアのつくりだした指導者の「虚像の誇大」こそが第二次大戦の最大、かつ唯一の特徴であったことに気づく。

中でも独特なのはドゴールへの評価だ。ウイシー政権がドイツにとつた行為（降伏）を認めず、自国の外へ出ると抗戦をとなえ、結果的に『自由フランス』と『レジスタンス』の神話をつくりあげた。その力は、方向こそ違えヒトラーに比肩すると言っ。なぜなら、そこにはもはや民主主義的過程や大衆はなく、自己内にある理想のフランスが存在する



世界的視野の必要性問う

だけだ。いわば、自意識の国家をメディアを通し「言葉」の力のみで戦勝国にまで押し上げた。その意味で政治の本質はほとんど文学に類似するのだとも述べる。

また、最も第二次大戦を欲したのが米国だったという見解も納得できる。米国は第一次大戦で除去しえなかったイギリスの植民地体制を破壊し、「自由で開かれた世界」をつくり、その上に君臨しようとした。その意味でアメリカ人の母親をもつチャーチルも、ファシズムのムッソリーニやヒトラー、粛清のスターリン、軍人の蒋介石に官僚の東条英機、みな戦後の米国支配体制のおせん立てであったのかも知れない。

戦争の目的はけっして一独裁者をたたいたり、民衆を解放することにはないのだ。戦後の支配システムの中で主導権をつちたて、自国の体制をより世界へと広げることにある。その位置に立つとき、為政者にとり人の死はただの数字の問題となる。

戦争の世紀は終わることを知らない。ならば局地的視点からだけでなく、より世界的視野に立ち日常を見る必要性を、著者は問うている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

筑摩書房・1800円

◇ふくだ・かずや 1960年東京生まれ。慶応義塾大学環境情報学部助教授。著書は「日本の家郷」「甘美な人生」など。